

主なる神のイスラエル救済への感謝の歓呼の賛歌

1 節に「賛歌」(琴に合わせた歌唱)とあるが、この詩はまさに「賛歌」である。「新しい歌を主に向かって歌え」(1 節初行)と「主を迎えて。主は来られる。地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き、諸国の民を公平に裁かれる」(9 節)はほとんど 96 編 1 節と 18 節と変わらない。同じ新年礼拝の詩なのであろう。メイズによればアイザック・ウオッツのクリスマス讃美歌「もろびとこぞりて」のテキストが詩編 98 編であるとか。(ヴァイザーによれば、Jorissen によって「なんじら主に新しい歌を歌え」でこの詩が讃美歌に取り入れられているという)イスラエル救済への感謝の賛歌である。悲しみや諸問題に圧倒されそうになったとき、私たちは主なる神への感謝と喜びから信仰生活を始めたことを心に留めよう。そして、終わりもまた主なる神への義で公平な審判で終わることに希望を持とう。この感謝と喜びと希望の間に私たちの苦悩があるのである。

1. 主に向かって歌え (1 節)

この詩は「歌え」で始まる。実際に声を出して歌うことで信仰は出来事となる。昨今、心に浮かぶことは、若き時から歌ってきた讃美歌のフレーズである！誰に向かって歌うのか？ Yahweh に向かってである。別の他者に聴かせるためではない。自分に向かって呟くのではない。主に向かって歌えと命じられ、勧められている。何を歌うのか？「ひとつの歌」をである。しかも「新しい」(hādāš) 歌である。伝承してきた古い歌を「新しく」今、ここで、歌うのである。歌の内容がそれを可能にする。なぜなら、神の救いの業は継続するからである！「主は驚くべき御業を成し遂げられた。右の御手、聖なる御腕によって/主は救いの御業を果たされた。」「彼は驚くべき事どもを成し遂げた」。

ヘブライ語は Hōwōšīāh(ヤーシャー)であるから「救いの御業を果たす」も良い翻訳ではあるが、Bible Hub では、「彼は彼自身勝利者となられた」と翻訳している。NRSV 参照。先日 9 月 16 日寺園喜基先生の出版記念会が行われたが「お土産」として頂いた栗(娘直子さんの製作)には「Jesus ist Sieger」=「イエスは勝利者である」というドイツ語が刻印されていた。たぶん、この言葉はバルトが影響されたブルームハルトの言葉であると思う。あるいは Christ as Victor (Gustaf Aulén) にも繋がる。主なる神は勝利者としてご自身とこの世界を「和解」された！彼の右の手と聖なる腕によって、あるいは「対して」とも理解される。ここにはもはや「敵」の言葉さえない。

2. すべての人と目撃者の前で、主は恵み、慈しみとまこと救いを示された (2~3 節)

「主は救い (yāšū'atōw) を示し/恵みの御業を諸国の民の目に現し/イスラエルの家に対する慈しみとまことを御心に留められた。」この句には、「恵み」(原語は義=sidqātōw)、「慈しみ」(へセド hasdōw 契約に対する忠誠心)と「まこと」(アーマン we'ēmūnātōw)、そして、「み心に留める」(ザーコル zākar) というヘブライ信仰の基本用語がみごとに登場する。主なる神はイスラエルに対して慈しみ深くあり、真実であり、イスラエルを思い起こすのであるが、ここでも神とイスラエルとの契約、契約における主なる神の忠実さと信実が思い起こされるのである。それがイスラエルにとっての「救い」なのである！そして、96、97 編と同じように、「諸国民」(諸異邦人たちがこの事実の証人・目撃者なのである。この救済の出来事は全世界の目の前で行われた。「地の果てまで」すべての人は/わたしたちの神の救いの御

業 (yašū'at) を見た。」バビロニアによる捕囚の経験、そこからの帰還を意味しているのだろうか。参照イザヤ 52:7-10。

3. 全地に向かっての呼び掛け (4~6 節)

礼拝共同体への賛美の呼び掛けは、4 節以下で「全地」に向かってなされる。信仰は具体的であり、地域的ではあるが、全世界を巻き込む出来事である。「全地よ」喜びと歌のノイズ=歓声を挙げよ！ 大きな歓声の内容は、「喜び」「歌」である。私たちは喜びをどのような形で表わし、また、どのような歌を歌うのか？ 讚美は、歓呼の声とともに、「琴」、「楽の音」(キノート)、「ラッパ」、「角笛」の伴奏付きでありオーケストラである。ある日曜日のパリ、ノートルダム大寺院のフルオーケストラの賛美は素晴らしく、また、チューリッヒのグロースミュンスター寺院で行われたポーランド男性合唱団の歌唱も素晴らしかった！ 6 節で「王として」という言葉が登場するが、恵みと義と信実、憐れみの支配である。王なる神の到来である。

4. 被造世界の呼応 (7~9 節 a)

礼拝共同体のオーケストラの演奏と歌唱に呼応して、被造世界もこの神賛美に加わるように呼び掛けられている。「とどろけ、海とそこに満ちるもの/世界とそこに住むものよ。潮よ、手を打ち鳴らし/山々よ、共に喜び歌え/主を迎えて。」潮騒(洪水)が賛美の拍手に聞こえているとは素敵な連想である。「とどろけ」は文字通りには「吠えよ」である。「そこに満ちるもの」と「そこに住むもの」は一つの言葉で海と世界とに住むものすべてのものに呼びかけられている。

5. 主なる神の来臨 (9 節)

「主を迎えて」全地のもの、天地万物、礼拝共同体が歓呼して主を迎える礼拝において、主なる神はすでに来たりし者として、将来に来臨される。そして、「恵み」「慈しみ」「真実」に加えて「義」(ツェデク)、「公平な憐れみに満ちた審判」(ミシュバート)が成就する。「主は来られる、地を裁くために (lišpōt)。主は世界を正しく (義において tēbēl bāsedeq) 裁き (yišpōt)、諸国の民を公平に裁かれる。」

この世はこの世によって公平に裁かれることはない。司法も「忖度」して権力者たちにおもねり、力ある者たちは、金儲けは目指しても公平を求めることはない。わたしたち信仰者の希望は主にある！ この希望の下で、地上に神支配が少しでも成就するために「不断の努力」をなしていこう。